

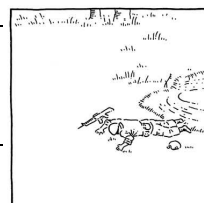
太宰府中学校2学年だより

No.27

R4. 3.2

文責：2年部 主任

戦争で死んだ兵士のこと



皆さんもよく知っているように、連日ニュースで「ウクライナとロシアの戦争」が報道されています。

家や建物を壊され悲しんでいる人々、住んでいる家を離れて遠い異国の地に向かって歩き続ける人々、親と離れて恐怖や不安に泣き叫ぶ小さな子どもたちの姿…報道されるたびに胸が詰まります。もし、自分がこの中にいたらどうなるのかとも考えてしまいます。

唯一の救いは、世界各国で「戦争反対」の声があがり、戦争を起こしたロシアの人々からも指導者に対する批判の声が日に日に強くあがっていることです。国や民族や宗教を超えて、人々が平和を強く望んでいることがよくわかるとともに、SNSのおかげで、その願いが増幅し、世界の人々が平和的解決に向けて1つになって動いているように思います。

戦争に至った歴史的・政治的・経済的な背景は複雑で計り知れないところがありますが、どんな場合でも必ず言えることは、「戦争は何も生まない。どんな理由や過程があろうとも、詰まるところ【人類として、社会として、国家として、世界として自滅行為でしかない】ことだ」と思います。

戦争に関する本はたくさんありますが、私は、皆さんにぜひ読んでほしい本があります。

小泉吉宏さんが書いた「戦争で死んだ兵士のこと」という本です。（右に一部紹介します）

数ページの小さな絵本ですが、中身はある兵士が過ごした数十年間の時間が逆行して描かれています。特に、最後のページには心が締め付けられます。

この本を読み終えると、誰もが好きて兵士になったのではない、幸せで温かい生活をおくることが誰もが望んでいることがよくわかります。下は、この絵本を読んだ方の感想です。

戦争でいつも一括りにされる兵士。そのひとりひとりに愛し大切に育ててくれた家族がいて、それまでのかけがえのない営みがある。
1ページ目の兵士の死から始まるこれまでの彼。8時間前には朝食を食べ、2日前にこの基地にやってきた。彼の人生は「戦争」で唐突に終わってしまった。戦争とはこういう事なのだ。戦争で死ぬために生まれてくる人間なんてどこにもいない。

先日、テレビのニュースで、ウクライナの女性がロシアの兵士に面と向かって「あんた、何しに来たんだ。戦争はいけないんだよ。」と諭している場面が放映されていました。

ロシアの若い兵士が女性から諭されて、泣きながら座り込んでいる姿を見て、「皆優しい心を持った同じ人間」なのだということを感じました。この兵士も、いわば「戦争の犠牲」だと思います。

一日も早く戦争が終わって、ウクライナの人々が元の生活に戻れることを願うばかりです。

戦争で死んだ兵士のこと 小泉吉宏 ベネッセコーポレーションより引用

保護者の皆様

進路学習会の詳細を裏面に掲載しております。お席は、お子様の隣にお座りください。
感染拡大対策にご協力とご理解のほど、どうぞよろしくお願いいたします。